

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## &lt;寄稿要項&gt;最近読んだ本(そとぼり通信No.32)

著者	日暮 聖
雑誌名	日本文学誌要
巻	54
ページ	117-117
発行年	1996-07-13
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019909">http://hdl.handle.net/10114/00019909</a>

# そとぼり通信

No. 32

## 最近読んだ本

日暮 聖

風邪の快復期の寢床のなかで漫然と読んだのに、幸せな気分になれ、しかも深く反省させられるという、近頃めったにない本に出会いましたのでお勧めします。一冊は、グスタフ・ヤノーホ著『カフカとの対話』（ちくま学芸文庫）。著者は一七才という多感な年頃に父親と同じ役所に勤めるカフカと知り合い、その仕事場で、またプラハの町を共に散歩しながら、芸術全般について語られるカフカの言葉を吸収します。フランス・カフカに魅せられた若い心のしなやかさが、すがすがしく伝わってきます。反省というのは、私はカフカについて、神経の鋭い偏った個性の特異な作家と思い込んでいました。しかしカフカは普遍的な存在であったということです。当時生まれいずる世界の文芸に目を配り、的確な批評をくだし、ヤノーホには弟をかばうかのように接しています。その抑制のきいた姿はセクシーでさえありました。ユダヤ人のカフカは、ベンヤミンのようにナチの虐殺を経験することなく四一才で亡くなりますが、しかし世界がどこへ向かっているかはすでに予見し、その苦痛を生きています。彼はいいいます。「人は、どうあっても書かねばならぬことだけを、書かねばなりません。」

もう一冊は佐藤春夫の『退屈読本』（富山房百科文庫）です。その文章のリズムに思わず声をあげて笑ってしまふことがしばしばでした。当時の著名な作家に対するあけすけで眼光鋭い批評におもわず唸ってしまいます。（誰を取り上げているかは読んでもお楽しみ）これほどのユーモアの持ち主を、浪漫派の抒情詩人とかってに評価を下していたことを反省しています。「わが父わが母及びそのこわれ」で、「私は母をどんな人と述べるのが出来ないほど愛している」、甘やかされた子供だったかもしれないが、詩人は子供の頃に溺愛される必要があると、興味深い言葉をもらしています。これは小説家とは対称ではないでしょうか。小説家は孤独の中に打ち捨てられた記憶があるのでは。

（文学部助教授）